

# NEWSきのくに

## きのくに活性化センター

〒646-0031 和歌山県田辺市湊1655番地の4  
田辺市民総合センター内  
TEL&FAX 0739-26-9670

発行責任者: 中田 肇  
発行日: 2004年1月20日

## 年頭にあたって

きのくに活性化センター 会長 中田 肇



きのくに活性化センターが設立されて3年目を迎えました。昨年は市町村の委託事業を中心に、各地の地域づくりや街づくり事業を支援し多くの成果をあげることができました。このように、順調に事業を進めることができましたのも、和歌山大学きのくに活性化支援センターをはじめ地域の関係機関の皆様方の温かいご支援の賜物であり厚く感謝申し上げます。

きのくに活性化センターは紀南地域における初めての産官学の連携組織であります。これまで、紀南に大学がなく、また、和歌山大学も近くて遠い存在でしたので、産官学の連携は大変難しいと思っておりましたが、きのくに活性化センターにおける和歌山大学の積極的な取り組みとその活動は、地域社会に貢献しようという姿勢がひしひしと伝わり大学に対するイメージを大きく変えました。昨年10月、和歌山大学フォーラムが田辺の地で開催されましたが、和歌山大学と地域との連携が大きなテーマでありました。今年の11月にはIT総合センター内に和歌山大学サテライトキャンパスのオープンも予定されております。そうしたことから、和歌山大学が今後ますます身近な存在となり、紀南地域のパートナーとして大きな役割を果たしていただけるものと期待しております。

広域合併、南部町まで開通した高速道路、熊野古道の世界遺産登録などわたしたちを取り巻く環境が大きく変わりつつあります。本年も、関係機関の皆様方とより一層連携を図りながらきのくに活性化センターの運営に努めてまいりたいと存じますのでよろしくごお願い申し上げます。

## 紀南を「循環型社会」のモデル地域に

和歌山大学きのくに活性化支援センター長 中村 太和



きのくに活性化センター・活性化支援センターが設立されて2年近くなりました。この間「生徒が先生：こどもパソコン教室」「新宮周辺広域市町村圏テレピア計画」などさまざまな事業に取り組み、紀南地域である程度の市民権を得ることが出来たと思っています。

今年度は和歌山大学のプランが文部科学省の地域貢献特別支援事業に採択され、「きのくに」関係で「地域内資源循環システム構築推進プロジェクト」が進行中です。農林業をベースに地域内で資源を循環させ、「循環型社会」のイメージを目に見える形で提示しようというものです。熊野川町では「菜の花エコプロジェクト」を進め、昨年末には廃食油をバイオディーゼル燃料に精製するプラントを現地に設置して有機農家のトラクターがバイオ燃料で動いています。他の自治体でも、マイカーを公共交通として利用する「みんながタクシー」、果樹ベースの資源循環など5つのプロジェクトが進行中です。

紀南は本来、多様な自然資源、歴史・文化遺産を持つ豊かな地域です。その資源を活かしながら紀南を「循環型社会」のモデル地域にしたいと思っています。皆様方のご協力をお願いいたします。

きのくに活性化センター後援事業

# 柚子収穫ボランティア 体験交流事業を終えて

きのくに活性化センター研究員

和歌山大学大学院経済学部研究科1回生 西川 昇



2回目となった、古座川町平井地区での同事業ですが、今年度も10月末から11月にかけて多くの和歌山大学生が古座川町に行き、柚子産業のお手伝いをしました。この様子は地元メディアにも多く取り上げられました。今回は、個人参加とともにゼミ単位での参加希望もあり、それぞれ収穫、秋祭りでの販売などを手伝うとともに、平井地区の秋祭りのもちまきに参加したり、同地区にある北海道大学演習林を見学させていただいたりと様々な体験をしました。

そして昨年度の事業後に、参加学生側からの指摘があった交通アクセスや地元の人たちとの交流という問題を解決するために、今回は紀伊田辺駅まで電車を利用、そこからは宿泊地であるぼたん荘の車で送迎してもらう方法をとりました。また交流事業では、平井地区は柚子の収穫最盛期であるために忙しく、学生との交流が難しいと判断し地元古座川町青年団と一緒に作業を行うことで、地元との交流を深めました。同年代で青年団員のほとんどが柚子収穫作業をするのがはじめてということもあり、話はずみ大変楽しく作業をすることができました。また今後増えるであろう柚子農家の高齢化による廃園問題に大学生とともに取り組む良いきっかけになったと思います。

今後の事業展開としては、一年を通して柚子農家の作業に携わる計画や、ゆず平井婦人部の製品を大学生が和歌山市のぶらくり丁商店街で販売するという計画が出ています。このように

地域と大学生が、積極的に交流を深め、これらの事業をきっかけとして学生が自分の調査研究、活動フィールドを確立することがそれぞれのスキルアップにつながるとともに、地域にとっても非常に有意義なことだ、と私は考えています。



フォーラム紀南21から

特集

## 『熊野古道世界遺産登録と広域観光』

横浜商科大学商学部  
貿易観光学科教授

羽田 耕治 氏

「熊野古道世界遺産登録と広域観光」をテーマに、第7回フォーラム紀南21(主催:フォーラム紀南21実行委員会/田辺広域商工振興連絡協議会)が平成15年11月6日(木)、ガーデンホテルハナヨで開催されました。

第一部として横浜商科大学商学部貿易観光学科の羽田耕治教授が講演。第二部のパネルディスカッションでは、和歌山大学経済学部の鈴木裕範助教授がコーディネーターを務め、泉正徳本宮町長、眞砂充敏中辺路町長、立谷誠一白浜町長の3町長と「熊野古道」を世界遺産に登録するプロジェクト準備会の小野田真弓代表をパネリストに、熊野古道の世界遺産登録をきっかけとした地域づくりについて討論しました。

今回「NEWSきのくに」では、羽田耕治教授の基調講演の要旨をご紹介します。

今、観光を通じた地域づくりが大きな問題になっています。この紀南地域では、熊野古道の世界遺産登録とそれを契機とした広域観光をどういうふうに推進していくかということが重要だと思います。

熊野古道の場合、見て学びながら歩くというサイトシーイング型の観光になります。このような型の旅行は、2箇所3箇所4箇所を転々と回るわけですから、広域で連携しないと意味はないということです。広域観光を推進するという＝広域で連携する、広域の連携を強化するということです。

熊野古道を中心とした広域観光に取り組んでいくときに、広域観光推進組織をきちんと考えなければいけません。現在田辺広域のそれぞれの市町村に観光協会があります。これからの検討課題かと思いますが、それぞれの市町村にある観光協会をどうするかという時に、この広域観光推進組織づくりの問題が出てくると思います。既存の観光協会がそのまま、あるいは、一緒になって対応できるかどうか。少し疑問の面もあります。

観光というのは、プロの要素が要求されます。また、一方で一般住民の参画が不可欠となるでしょう。そもそも「観光」とは、昔の中国の言葉で「国の光を観る」、「国の光を観せる」という意味です。他国の非常にすぐれた制度・文化を観に行く。逆に、自国のすぐれた制度・文化を紹介する。これが「観光」の語源です。ですから、すぐれているというようなものをいかに磨き光らせて紹介するかということが、地域において観光というものを考えるときの基本です。外の人に対して誇りが持てる地域をつくる時に、

観光業者の方だけではなく、一般住民の方が関わっていくことが大切です。自分の地域の光り輝くものを磨き、地域が輝き、人が輝く、そういう地域づくりをしていくことが、観光を通じた地域づくりというものだと思います。つまり、観光を通じた地域づくりの主人公は、一般住民の皆さまなのです。

20年、30年前に比べると、旅行に活発に出かける時代で、旅行に出かけることが極めて当たり前になっています。また、高齢化が進み、旅行経験が豊富になってきています。そんな中、いかに感動するか、感動させられるかが観光にとって重要になってきています。地域の自然、歴史、文化など、「なるほど」と感じてもらう、抱いてもらうということが非常に大きな要素になっています。単に景色のいいところを観て旅行者が満足する時代は終わりました。旅行者の知的好奇心を刺激するように、地域自然や生活文化の意味づけを紹介したり、由来なり奥なり裏なりを観せていくこと。これができるかどうか地域観光の大きな分かれ道になってくるのではないかと思います。

現在、「スローライフ」とか「スローフード」、あるいは「スローツーリズム」、要するにのんびりと地域の自然なり生活文化なり人情なりに触れながら旅行することへの志向が高まっています。熊野古道を楽しむ、紀南の観光を楽しむというときに、この地域だからこそ、のんびりゆったりとした楽しみ方ができますという情報発信をし、あるいは、これが「熊野ツーリズム」だということをもっと売り込んでもいいのではないのでしょうか。

【研究室から】

教育学部



和歌山大学  
教育学部助教授  
米田 頼司

私の専攻は社会学ですが、その中でも知識社会学というのが大学院生時代からの専門分野です。これまで専門職の社会的役割などについての調査研究をしてきましたが、このような研究テーマと並行して和歌山にきて始めることになったもう一つの研究テーマが、環境問題に関する社会学的研究です。この環境社会学は、地域で環境保護活動をして

いる大勢の市民や住民の方々と出会うことでテーマにするようになったものです。

和歌山に来て、現代社会における知識の専門性や専門分化の意義と限界を考え、その一方で地域における環境問題を考えるなかで、少し前から気になっていたのがエコミュージアムという考え方です。“エコ”はエコロジーのエコで“ミュージアム”は言うまでもなく博物館という意味でのミュージアムです。このエコロジーとミュージアムとが合成されて創

られたエコミュージアムの考え方は、専門家が中心になって展示物になるものを博物館に収集し展示するという考え方とは違って、展示物は本来あるべき自然や生活環境の中に置かれるものと考え、また、地域の自然や生活環境をエコミュージアムということで再認識してみようというものです。

このようなエコミュージアムの考え方は、1960年代にフランスで成立したのですが、最近、日本でも地域住民が当事者となる新たな地域づくりの仕掛けとして注目されるようになってきました。各地で行われるようになっていく地域資源の再発見とか“地域の宝探し”とかは、エコミュージアムの考え方に通じるものです。

エコミュージアムの主人公は地域の生活者である住民ですが、ここでの専門職の役割は、地域住民のパートナーとしてエコミュージアムの設立・運営を支援するというものです。

私は、「紀伊半島にエコミュージアムを！」ということで、学内の先生方や学外の方とチームを組み、現在その一員として、龍神村の住民の方や役場の方々と話し合っただけでエコミュージアムづくりに向けた取り組みを始めています。

## 地域はいま



## ～大塔村世界遺産プロジェクト～

大塔村世界遺産プロジェクト会長 谷口 和樹

大塔村世界遺産プロジェクトは昨年10月に大塔村の有志を中心に「世界遺産地域にふさわしいふるさとを自分たちの手で創っていく」という主旨のもとに発足した。

広域合併を間近にひかえた今、私たちは自分たちの住む「ふるさと」がいったいどうなってしまうのか、という危惧を感じている。すでに私たちのふるさとは高齢化や少子化、就職難といった様々な問題を抱えている。このままでは、私たちのふるさどがどうしようもなくさびれた地域になってしまうのではないかと子供や孫にそんなふるさとを残していいのかわからないという将来への不安が私たちに「何とかしなければ」という思いに駆りたてた。このようななかで、「高野熊野の世界遺産登録が実現しそうだ」という話が持ち上がった。

もとより大塔村は世界遺産指定地域ではない。しかし、国道311号沿いにある鮎川地区は熊野古道中辺路ルートの入口として絶好のロケーションにある。幾度かの会合を経て、この恵まれた立地を生かして、情報発信・観光サービス・地域物産販売の拠点を作り、世界遺産を活用した新しい地域の振興をめざしていこうというプランが私たちの目標としてあがるようになった。

また、私たちは、最初から補助金をあてにするようなことは避け、自分たちでできることから始めていこうという基本姿勢を決めた。このために、地域物産販売の前段階としてのフリーマーケットの開催や、観光サービス・情報発信の第一段階としてWEBによる観光情報の発信などがアイデアとしてあがってきた。

すでに本プロジェクトの主催するフリーマーケットは大塔村「水辺の学校」を会場として月1回のペースで開催されており、「紀南最大のフリーマーケットにしよう！」という当初の目標は達成されつつある。さらに自分たち自身の足で古道を歩き、古道について学んでいこうという主旨から昨年11月には中辺路町高原～近露間にて「熊野古道清掃ウォーキング」を実施した。今後は本プロジェクトの活動に対して広く紀南地域の理解を求める意味から、NPO法人への申請も計画している。

しかし、当初の目標プランから考えれば、私たちの活動はようやくその途についた、という段階である。6月の世界遺産登録にむけ、私たちは自分の持てる力を最大限に発揮して地域の活性化につとめていくつもりである。

## ～編集部から～

きのくに活性化センターが設立から2度目の新春を迎えました。

「NEWSきのくに」第7号では、大学生と地域の交流として「古座川町柚子収穫ボランティア」体験レポートを和歌山大学院生の西川昇さんに書いていただきました。また、「研究室から」では龍神村で住民・行政と協働で「エコミュージアム」プロジェクトを進める和歌山大学教育学部の米田頼司助教授の研究をご紹介しました。

紀南地方はいま、市町村合併や紀伊山地(高野・熊野・吉野)世界遺産登録を控え、大きな変化のなかにあります。紀南地域の活性化のために、これからもさまざまな活動に取り組んでいきたいと思っております。